
壁の影のように

暮音孤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壁の影のよつて

【データ】

NFT2021

【作者名】

暮音孤

【あらすじ】

頑なに少女の名前を聞くまことする少年と、意地でも少年に名前を呼ばせようとする少女の恋愛一幕。

(前書き)

下駄箱は郵便受けではないことを、恋する乙女とやうは知らないのだろうか？

いや、分からなくなるほど、眞面目になつていいのだろうか？
ならば、違いくらいは教えてやつた方がいいだろう。

「放課後、屋上で待っています」 そう書かれた便箋を手に、少
年は慣れた足取りで階段を上つていった。

梅雨の明けた初夏。それも夏休み前の試験期間を抜けた終業式、さらにそれさえも終わつた午後だというのに、開放感は皆無だった。

進学校とまではいかないにしろ、大学進学の為にがりがり勉強する予定が組まれているから、という高校三年生としての悩みではなく、下駄箱で見つけてしまった便箋が事の発端だ。

携帯電話が普及した現代において、古風な便箋……とまあ、メールは相手のアドレスが分かつてることで有意となる伝達ツールだが、便箋だって送り主を明確にしなくてよい伝達手段ではないはずだ。

そして、差出人不明の呼び出しは、差出人の存在が気になるから正直勘弁願いたい。しかも、内容が時間と場所指定のみというのも勘弁願いたい。

そんなことを頭の中でくるくる巡らせながら指定先の屋上に赴くと、差出人と思われる女子が待つていた。誰を？ たぶん、この僕を。違えばいいのに。

胸に手を当てて、過呼吸氣味な一年生らしい女の子だ。

「す、好きです。付き合つてください」

僕が来たことが本当に嬉しいのだろう。相手の、この僕の顔など見ていないだろう。面食らう勢いで告白された。

そんな幸せ者の僕はと言えば。一拍置いて、返事をした。あとは、彼女が居なくなるのを待てばいい。僕は遠くの山に乗つかる巨大な入道雲を視界の端に捉えながら、いつかに見た誰のものとも伺えない影のことと思いを馳せた。

想像を絶する圧倒的な閃光が一瞬のうちに壁に影を写し込むことで生み出された、持ち主のいない影の標本。果たして、持ち主の親

子はどんな気持ちの中で、亡くなつたのだろうか。 なんて、どうでもいいもの思いを。

だが、それも直ぐにやめる。やめるが、だからといって何かを始めるわけではない。とりあえず向うだけ。

田の前でぼうぜりと涙を零す女の子に、僕はかける言葉を持ち合わせていない。

「振られちゃいました」

だつて、まだ五分と経っていない。

「振られちゃいました」

そんな非道い僕に、どんな言葉が喉から出るのだろう。

「振られちゃいました、ね」

まだ涙は頬を転がっている。それでも、彼女はよつやく壊れたテープでなくなつてくれた。このまま、ずっと続いていたら、僕の頭も同じようになつていただろう。

僕の前に立つ彼女は、可愛い女子だとは思つ。白いブラウスに、襟の赤いリボン。チェックのスカートは膝小僧を覗かせるくらい。ターメリック色のブレザーはスカートの下地と同じ色をしていた。学校指定の制服を指定通りに着こなして、地味過ぎないのだから容姿容貌に減点はない。髪だって脱色も、染めてもいい。襟に掛かるか掛からないぐらいの長さは正直好みだ。そして、ぽっちゃりでなければ、瘦けてもいい顔。それだつて、十分に魅力的だ。

ただ、そんな子が自分に思いを伝えて、僕には定型的な件の言葉しか用意されていなかつた。

もちろん『悲しそうな面持ちで謝』つて、有らん限りの勇気をもつてぶつけられた告白を、『否定』したのだ。

認めておくが、僕自身もまだ片思いだ。誰とも付き合つたことはない。

だけど、失敗した時の備えに、下にネットを用意するようなことは出来ない。それは僕自身に巻き付けた千切れることのない絶対的な鎖なのだ。

と、気が付けば僕は俯いていたらしい。少女の上履きが大きくなつていた。どうやら、こちらに向かつて歩いているようだ。ひどくゆっくりとだが、危なつかしくはない。

これまでに一度ほど同じ場面を体験したが、今回のケースは初めてだ。振った後も執拗に粘られた一度目に、振った直後に友人らしい女子が殴りつけてきた二度目。三度目には何が待っているのだろうか。正直なところ、同じ展開は御免だ。あと、断つておぐが、僕は女殺しでもない。何せ、僕は好きな子に思いを未だに伝えられない小心者なのだから。

歩み寄つて来る彼女に、僕は顔を上げなかつた。そうしたら気が付いた。彼女の上履きには逆さに学年、クラス、名字が書かれていることに。

少し見入つていたところに、彼女は恥ずかしそうに言つた。

「名案だと思つたんですけど、間抜けですよね」

僕は振つた子の名前を覚えない主義だ。振つた数なんて、男の勲章にはなり得ないのだから。ならば、何某の勲章という何某も必要ない。僕はぼうっと宙に飛び込んでいた彼女の名字から逃れるように背を伸ばした。

「先輩」

そこには、ちょうど彼女の横顔があり、

「あたしも知つてました、先輩には好きな子がいるつてこと。だけど、」

彼女は一つだけお願ひをしてきた。

「あたしの名前を呼んで欲しかつたんです」

無理なお願いだ。だつて呼んだら覚えてしまつじやないか。

「屋上を離れたら忘れちゃつてかまいません。あたしは一年二組の

「

僕は彼女の言葉を遮ろうと、耳を塞ぐ。目も勢いで瞑つてしまつた。果たして、彼女は名前を言つたのだろうか。

目と耳に感覚がじんわり戻つてくる。ギシ、ギシと何かが軋む音に次いで、ブレザーがふわりと舞うのを見た。

「 ッ

声は出なかつた。掛ける名前を知らなかつた。違う。知つてはいる、名前は覚えている。だけど、それは本名だろつか。少なくとも、初めに聞いた名前と上履きの名前は違つていた。

君は誰だ。君は誰だ。君は誰だ。君は。君は。君は

「先輩。あたし、 つて言います。でも、忘れちゃつてかまいませんよ」

君は誰なんだ。

「むしろ忘れてください。だつて、思いが通じなかつた時の、防護ネットにしたくないつて先輩の考え方と共感できるんです」

そこで、ふと思つ。総毛立つような焦りが雲散霧消した。彼女はまるで自分のようではないか、そう思つた。だが、その次の瞬間、また別の悪寒が全身を襲つた。

「この、女殺し」

僕に思いの丈をぶつけた少女は、そこが高校の屋上、それも転落防止の柵を越えた先にいるとは思えない軽やかな動きで、僕を笑つた。

そうだ、これは彼女の自殺じゃない。僕の殺人になる。

そう思つた矢先に、心を読んだかのように彼女は言つた。

「先輩。先輩はあたしを殺してなんかいないですよ。あたしが証明します。遺書にも先輩の名前はありませんから」

でも、状況がそれを許さないではないか。屋上には、自分と転落する彼女。僕は視覚、聴覚を塞いで、彼女が屋上のへりに移動するのを全く拒んでいいのだから。

「あたし、不安定なんですね。時おり、解放されたくなるんです。もちろん、この身体からですよ。でも、いつもは名前を呼んでくれる人がいるんです。それで安定するんです」

暗に、僕に名前を呼ばれたいと言っているのだろうか。しかし、この話しが事実ならば、違う名前を呼んだが為に、飛び降りられかねない。

「先輩。たとえ話ですけど。もしかしたら、あたしは先輩の思い人と同姓同名かもしません。先輩は名前を呼んでくれますか？」
不安定というのは本当のことなのだろう。話しがぽんぽん変わる。
これでは、名前を知らないことがもどかしいくらいだ。

「呼んでくれますか、名前？」

「呼ぶよ、呼ぶ。だから、名前を」

「ちゃんと呼んでください。そして、忘れちゃってくださいね」

何の変化もなかつた。風が攪つたわけでも、バランスを崩したわけでもない。ただ、僕の言葉を心底喜び、彼女は後ろに倒れ込んだ。

「あ

ずつと柵を介して話していた僕と彼女。つまり、彼女の背中には支えがなくて。止める時間なんてなくて。

「あやめです！ やよづなり、先輩」

ドサッという音が鈍く届いた時、僕は震えてカチカチと鳴る歯にも気が回らず、その場に立ち尽くしていた。

あれから、三年が経過した。僕は精神的なショックから一年留年して、今は大学に籍を置く。どうにか通い始めたところだ。

結局、僕は片思いの女子に告白は出来なかつた。

その子を呼ぼうとする、別れを告げて自殺した彼女を思い出すからだ。名乗つた名字は全て偽名、全く違うものだったが、名前だけは正しかつた。そして、それが一番の問題なのだ。

恐らく、僕に彼女の名前を忘れられる口は訪れないのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n72021/>

壁の影のように

2010年12月30日19時55分発行